

一

次の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1 任務を逸脱する行為だ。
- 2 宮内庁御用達の名店で買う。
- 3 これ以上の勢力の拡大を阻む。
- 4 逆鱗に触れる。
- 5 花で食卓を彩る。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 シツチの埋め立て工事に反対する。
- 2 ヨウリヨウが悪くてなかなか覚えない。
- 3 寝不足で注意がサンマンになる。
- 4 あえて過去の事件にゲンキユウする。
- 5 髪をタバねる。

三

次の 1 ～ 5 には、ものの数え方をあらわす漢字一字が入ります。その漢字を使って数えるものをア～ソの中から一つ選び、記号で答えなさい。

例 □ の輿に乗る。↓ 空欄に入る漢字は玉

その漢字を使って数えるものはソ（キャベツ）

・白 1 の矢が立つ。

・馬 2 をあらわす。

・流れに 3 ます。

・笑う 4 には福来たる。

・真綿で 5 を絞める。

ア	ざるそば	イ	和歌	ウ	部屋	エ	自動車	オ	いす
カ	うさぎ	キ	くじら	ク	ひまわり	ケ	仏壇	コ	小説
サ	たんす	シ	俳句	ス	大砲	セ	寄付	ソ	キャベツ

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

笑われた悲しみ

春の日のぼかぼか照る河原で、子どもたちがすもうをとっていた。

その中で十三歳の川村松蔵がいちばん強かった。年の上の子がかかっても、三度に二度までは負かされた。五番ぬきをやってみると、やはり松蔵が勝ちぬいた。

「今日は松蔵に、すっかりなめられてしまったな。」

十四の音丸はそういつてへ 1 砂地にすわった。

▽「なあに、すもうなどはどうでもよい。侍の子は槍や刀で強ければよいのだ。」

十五の勇太が負けおしみをいった。

「でもすもうに強いと合戦に出てくみうちして勝てるぞ。」といった子がある。

「うちの兄さまは、去年の関ヶ原合戦に、くみうちで手柄をした。」といった子もある。

勇太はその方をにらみつけた。

「それぐらいなんだ。おれの父さまは去年、槍で働いて、敵の首を三つもとった。だからこんど殿さまから、五百石の加増をいただいた。すばらしい手柄だろう。」△

勇太の父親は、二百石の侍であったが、加増にあずかつて、今は七百石の身分に出世しているのである。

「うちのおじいさまも、たくさん加増をいただいている。」

音丸も負けずにじまんだ。

「おれの父さまもいただいた。」

「私の父さまも。」

「どの子も口々に、めいめいの親や兄の手柄をじまんしあつた。その中でもうに強かつた松蔵だけはなにもいわない。ただじつときいているだけであつた。すると、勇太がいじわるそうに問いかけた。」

「おい松蔵、どうしたのだ。おまえはなぜだまつているのだ。おまえのおやじは加増をいただかなかつたのか。」
「うん、まだ。」

松蔵は口ごもりながらこたえた。

「なあんだ。それではだめだ。こんどいただければもういただけないぞ。おまえのおやじはなんの手柄もなかつたのだらう。わつはつは。」

▼と勇太のあざわらい。松蔵はおもわず顔が赤くなつた。

「おまえのおやじは、体こそ大きいが、いくら大きくても手柄なしでは見かけだおしだ。かわいそうに、あつはつは。」
「みんなも笑えといわんばかりであつた。」

子として親ほど大切なものはない。親を笑われて腹がたつ。だが松蔵の父は去年の合戦にでることはでたが、加増どころかすしのごほうびさえいただけなかつたのである。元が百二十石の侍で、いまも百二十石のままである。すこしも出世していない。手柄なしといわれてもしかたがない。

じつとがまんしてだまりこんでいたが、松蔵はくやしくてたまらなかつた。

やがて日が暮れかかつたので、河原からへ 2 ヲ、広島城下のわが家へかえつた。

「松蔵どうかしたの。顔色がわるいではないの。お友だちにでもいじめられたのかえ。」
門口にいた姉のお若がしんぱいしてたずねた。

「ううん。なんでもない。」

松蔵はかぶりをふつて裏へまわつた。そこには父の川村伝右衛門がへ 3 ヲ馬の手入れをしていた。父の顔を見ると松蔵は、さつきのくやしさが胸にこみあげてきた。でも勇太に笑われたことを、ありのままには告げたくない。

「父さま。なあ父さま。父さまは去年の合戦には、どういうふうな働きをしたの。」

とおまわしにたずねてみた。

「みようなことをきくのだな。どうしたのだ。」

父は黒い馬を洗つてやりながら、むこうをむいたまま問い返した。

「ううん。父さまはよその人たちの、勇ましく働いたことなどは、よくはなしてくださつたけれども、自分の働いたようすなどは、いつたずねても笑うばかりで、まだはなしてくださらないでしょう。だからききたいのです。」

「そうか。だが話してきかせるほどのことはないのだ。わしは去年は、たいして働かなかつたからな。」

「なんにもないの。」

「ないなあ。」

「でもなにかすこしぐらい手柄をしたのではないの。」

「手柄か。は、は……。手柄というものは、だれもしたいのだが、しかし手柄をするのにつごうのいい場合にぶつからぬと、したくてもできないものだ。つごうのいいばあいにぶつかるのは、十人に一人か二十人に一人かだ。わしはその運がなかつたのだよ。」
これをきいて松蔵はがっかりした。なんとなしに悲しくなつた。夕暮れの空にはさびしく鳥が鳴いていた。

「だがな、松蔵。」

父は気らくそうに笑つた。

「わしは手柄こそなかつたが、卑怯なことはしていないぞ。武士として恥ずかしくないつもりだ。しんぱいするな。去年は手柄がなくとも、このつぎの合戦にうめあわせをすればよい。その気でくじけずに、わしはこのとおり馬も大切にしてく強く、自分も体

をしつかりきたえている。わかったか。は、は、は……」

父はごほうびも加増もいただけないが、それをすこしも気にしてはいないのである。松蔵はなんとなく気が晴れてきた。しかしまだ、勇太に笑われたのを忘れることができなかった。勇太にいいかえしてやることはできないのだと思えば、やっぱりくやしかった。▲

ところが、その晩おそくなつてから、父にも松蔵にも思いがけないことがおこった。父の川村伝右衛門へ、にわかにお城からお使いが来て、

「殿さまのお召しだ。いそいでお城へあがるように。」と申しわたしたのである。

「夜おそく、にわかにお呼び出しとはめずらしいことだ。よいことか悪いことかわからないが、どっちにしても容易ならぬことであらう。」と、心に案じながら伝右衛門は、いそいで登城した。

去年の敵

殿さまというのは、荒大名で名高い、福島左衛門大夫正則である。

正則は去年の秋、徳川家康に味方をして、関ヶ原の合戦に出たが、その少し前にやはり徳川方の大将たちとともに、岐阜の城を攻めた。

城の敵は、はじめは野に出てきて戦ったが、その中にすぐれて勇ましい武者があつた。正則はその働きぶりをながめていて、敵ながらもあつばれな勇将だと感嘆した。

それは岐阜城主の片腕とたのまれていた、木造大膳こづくろだいぜんという侍大将であつた。しかしそのときの戦は、ついに岐阜城主が降参したので、大膳は城をたちのいて浪人となつた。

そこで正則は、わざわざ大膳のたちのき先へ使いをやつて、「わしの家来になつてくれぬか。」と、相談をかけた。大膳もその手あついまねきに感激して、「それでは家来にさせていただきます。」と約束した。そこで正則は、ただの勇士ではない、二千三千

の士卒をさしづしていた勇将であるからといって、かくべつに二万石の知行をあたえた。

その大膳を相手に去年の岐阜の戦いの話をはじめていたのだった。

「あの時のきさまの戦いぶりは、なかなかものすごかつた。この正則の軍勢も、ほかの大将たちの軍勢も、一時はあふないほどであつた。」

正則がこういつてほめる。

「しかし、とうとう私のほうが負けとなりました。」

大膳は笑つた。

「敗れて城へひきかえそうとすると、殿さまやほかの大将がたの軍勢が、きびしくとりかこむものですから、ずいぶんこまりました。」

「そうであらう。こつちは軍勢が多かつたからな。だがきさまはいくどもふみとどまつて、勇敢ゆうかんにふせいだ。ふせぎながら部下を先へ先へと、うまく退却させた。あのかけ引きはじつにみごとなものであつた。」

「そうでしたかな。まあ、どうかこうかあときは、部下をまとめて城へ引きあげたのですが、その途中のことです。城に近い七曲がりの山道にさしかかりました。その時はもう追撃してくる者はみんな追い返したつもりでおつたのです。ところがふりかえつてみると、一騎はるかに追いかけてくる者があります。」

「一騎だけか。」正則は問いかえした。

「ただ一騎です。その時私の部下は、たいいてい先へ引きあげていたが、それでもまだ私のそばには十五、六人の供がついていました。そこへたつた一騎で、待てえ待てえ、勝負をせい、とよばわりながら追いかけてまいりました。」

「大胆きわるまるやつだな。」

「めずらしい勇士です。私の供の士卒がさえぎつたが、その勇士は馬でけちらし槍でたたきたおして迫ってきました。たおした者

の首などは取らずに、私を目がけて、一陣の頭であろう、大将であろう、逃げるとは卑怯だぞと、こうののしりながら追いかけてくるのです。」

「よほどの剛勇だな。」

「鬼か仁王が荒れ走るように見えました。それがどこまでもと、七曲がりの坂をまがりまがって、追いも追うたり、とうとう城の門前近くまで追いせまったのでござります。」

「よくもそこまでふみこんだな。」

「これでは私まんがなりませぬ。さらば勝負と槍をかまえました。しかしかまえてかかると、供の士卒が馬の口をとらえ、しりをたたいてむりやりに私を門内におしこみました。」

「もつともだ。きさまは、侍大将だから、一騎討ちの勝負よりも、あのばあいには一時もはやく城へはいつて、防戦のさしずをせねばならぬ。ただ一騎の武者を討ちとるよりも、城をとられぬ用心が大切だ。」

「そこで供の者はすばやく門の扉をとじました。そのとき先にひきあげていた部下が、かの勇士を目がけて鉄砲の筒口をそろえて打ちだしました。」

「うーむ。それではたまるまい。」

「しかしその勇士はたおれませぬ。勇猛な者には弾もあたらぬものか。その武者は筒煙の中につっ立ち、しばらく城櫓をにらんでから、高々と名乗りをあげて立ち去りました。」

「ほう。それはめざましかつたであろう。」

「すごいほどみごとな、武者ふりでございました。今日となつてもその姿が、へ 4 〳私の目にのこっていますが、さてその武者はそののちどうなったものか。そののちの戦いに討ち死にもせず、いまでも生きているならば、一度対面して、あの時のことを話しあいたいものと存じます。」

「で、その武者はなんと名乗ったのか。」

「殿さまは何者とおぼしめます。」

「うむ。あの戦いには諸大将の家来が、入りまじっていたのだが、もしやこの正則の家来でなかったか。」

「いかにもそれは、殿のご家来でござりました。その武者は城をにらんで——福島家侍、川村伝右衛門と勝負する者はないか、ないかないかと、くりかえしてよばりました。」

「おう。やったな。しかし川村伝右衛門とは……」

正則は小首をかたむけた。

五十万石の大大名ともなれば、家来がおおい。下々の者の名まえでもいちいち覚えきれないが、いちどでも自分の前へ目見えにでた侍の名ならばわすれるはずはないのである。その勇士が馬上であつたからには、侍に相違ない、ところが^①正則は川村伝右衛門という名を、まだきいたことがなかつたのである。

「わしは一こうおぼえない名だが、だれかしらぬか。」

と、おそばのものを見まわした。

そこには七、八人の武功の侍たちもいあわせたが、だれもその名を知っていなかった。ただ老臣の一人が、
「あるいは与力組の者ではありませぬかな。」

と、こたえた。

なるほど侍の中には直臣と与力とがある。おなじく侍でも与力は身分がひくい。正則の前に出られるような者はめつたにない。おおくは目見えをゆるされていないから、与力ならば正則もいちいち名をおぼえていないわけである。

そこで右筆（書記）に命じて、与力の人名簿をしらべさせたところが、あつたあつた、川村伝右衛門という名が見えた。それは百二十石の与力侍であつた。

「おう。それではやはりこの正則の家来であったのか。それなら掘り出しものだ。明日といわず今夜目見えをゆるす、大膳にも対面させてやる。すぐによびだせ。」と、小姓にもうしつけた。

そこでお使いが伝右衛門の家へはしつたのであった。

意外な幸福

伝右衛門はそんなこととは知らない。

夜中ににわかによびだしであるから、これはただごとではないと、しんぱいしながら登城した。小姓にあんないされてはるか末座に平伏すると、

「近うすすめ。ゆるすぞ。すすめ。」

正則は上機嫌でさし兼ねいた。そして大膳のそばまですすませると、

「どうだな大膳。これが川村伝右衛門だ。見おぼえあるか。」

「ござります。」

大膳は伝右衛門をじっと見た。

「川村うじ、わしは木造大膳だ。このたび殿さまへ召しかかえられたが、お手前とは去年出おうたことがあるな。」

「さあ。どこでお目にかかりましたことでしたか……」

伝右衛門はまだ気がつかなかった。

「それ岐阜の合戦の時、わしが城外七曲がり口の坂道を引きあげる時、ただ一騎で追いかけたのは、その方ではなかったか。」

「あ、そういわれると思ひだしました。それではあの大將が、大膳どのでござったか。あるときお手前さまは朱の頬当てをつけられていたゆえ、お顔はわからず、またお名乗りもなされぬから、だれと知りようもない。ただよい敵と見たゆえ追いかけてました。それでは、あるとき、大將と見たのが大膳どのでござったか。」

「いかにもこの大膳だ。」

「あるときお手前さまは、鹿角の前立て物打った兜、黒具足、馬は葦毛でござったな。」

「そのとおり、また川村うじは十文字の槍、四半の指し物、馬は黒駒であったな。」

「はい。」

「具足も黒、胴には輪違いの紋があった。」

「いかにも。」

「ならばまちがいはない。あときの敵はたしかに川村うじだ。」

「おうおう。」

伝右衛門はおぼえず膝をうった。

「あるとき槍をしごいて、よびかけながら近よったお手前の武者ぶりは、まことにAの勇士と見えた。」

「いや。さようにほめられてはおほずかしい。」

「いや。みごとであった。あるとき槍を合わせたなら、わしが討たれるかお手前が討ち死にか、どつちかの命はなかったが、あのまま別れたからこそ、こうしておたがい生きてたたいま対面もできたというもの。去年の敵が今日の友だ、これからはむつまじくまじわりたい。」

「もつたいないおことば、大膳どのは音にきこえた勇將、ことに二万石の大身、私などへお友だちとはおそれいます。」

「そうではない。侍は武勇をとうとぶ。武勇に身分の上下はない。わしはお手前の武勇をうやまうのだ。」

「あれほどのことを武勇などとは、いよいよもっておほずかしい。しかし大膳どのほどのお方から、さようにおほめいただくのは、この伝右衛門の身にとって、まことに名誉に存じます。」

大膳と伝右衛門がうれしげにあいさつした。正則もうれしそうだった。

「伝右衛門。」

「は。」

伝右衛門はうやうやしく手をついた。

「その方がただ一騎で大膳を追うた気象のするどさ。^(注1) 一人の味方もつづかぬのに、城門までもおいかった大胆さは、たとえ敵の首をとらずとも、とつたよりもすぐれた武勇じゃ。しかしそれほどに働きながら、なぜにだまっていた。なぜいままでとどけ出なんだか。」

「おとどけもうしあげるほどのねうちはないと思いました。あるとき私が運よく大膳どのの首をとったなら、それは手柄ともうせましよう。また士卒の首でもとつて帰ったなら、働いた証拠にもなりましよう。しかしさんねんながら、あのときのようすを見たのは敵ばかりで、味方は一人もしりませぬ。味方の知らぬようなかげのことを、自分からもうしでるのははすかしゅうござりました。」

「ならばあとで、懇意な友だちくらいには話したことがあるか。」

「いえいえ。」

「だれにもいわなんだか。」

「もうませぬ。」

「さてさてえんりよぶかいな。どうだ大膳これをどう思うか。」

正則は大膳を見た。

「いよいよ感服いたします。たいていの者はわが働きは、針ほどのことも棒ほどに吹聴いたします。ない手柄もあるように見せたるのに、これはなんという謙遜な、潔白な精神でござりましよう。まことにまことにおくゆかしく存じます。」

大膳はこたえた。

「いかにもそうだ。」

正則は力をこめてうなずいた。

「その謙遜な心がけも、また勇猛な追撃もともに感心である。これが早くわかったなら、ほうびも早くあたえたであろう。しかしおくれてもこのままにはしておけぬ。今夜の勇将と勇士の、めでたい再会を祝うて、ほうびのかわりに伝右衛門へ、この正則から酒さかなをつかわそう。」

正則はゆかいそうに筆をとつて、へ 5 ヲ一通の書状をかいて、伝右衛門へあたえた。それはただの酒さかなではない。酒さかなよりははるかにとうといおすみ付きであつた。

伝右衛門がおしいたいて拝見すると、^②加増二千石をつかわす、与力二十騎の組頭を申しつけると、かいてあつた。

伝右衛門はびつくりした。そしてあまりのありがたさにへ 6 ヲ涙をこぼした。

× × × × ×

家では松蔵も母も姉のお若も、しんぱいして待ちかねていた。そこへ伝右衛門がにこにこしてお城からかえつてきた。

「みなみなよろこべ。」

つつたつたまふところからすみ付きを出した。

「これを殿さまからくだされた。わしは今日までは、ただの与力であつたが、今夜からは与力二十騎の頭に出世したのだ。知行も二千百二十石にあがつたのだ。」

伝右衛門は、そのわけをすっかり話した。これをきくと「わつ。」と、松蔵が泣きふした。しばらくすると涙をひきこすつて、

「ああ、これからはもう **B** などに父さまを笑わせるものか。」そういつてまた泣いた。

しかし父を笑われてくやしかった松蔵は、やがてしずかに考えた。

——我が父を笑われるのはくやしい。ひとと親を笑われてはくやしかりう。我が父が出世したとて、ひとの親をあなどるな——と、自身で自身をいましめた。

松蔵はそのあくる日も、太田河原ですもうをとって遊んだが、父の誉れはだれにもかたならなかった。Bにたいしてもいわなかった。

(注1) 気象：気性のこと。

(大倉桃郎「我が父強し」より)

問一 Aには「一人で千人の敵に対抗できるほど強い」という意味の四字熟語が入ります。その四字熟語を漢字で正しく答えなさい。

問二 Bに入る人名を本文中から抜き出さない。

問三 へ 1 へ 6 へに入る言葉として適当なものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア さらさらと イ ばつさりと ウ ありありと
エ はらはらと オ ペたりと カ せつせと
キ しゅんぼりと

問四 本文中の▽から△までの場面での勇太の心情として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 年下の者にすもうで負けてたいへん悔しい。
イ すもうが戦場でも役立つことを周囲が認めるのが気に入らない。
ウ 俸^{ほうろう}禄の低い家の子どもにすもうで負けたことが腹立たしい。
エ 自分の意見に周囲の者が賛同しないことが不愉快だ。
オ 自信を持っていたすもうに負けてがっかりした。

問五 — 線部①「正則は川村伝右衛門という名を、まだきいたことがなかった」とあるが、この理由が書かれている最も適当な一文を本文中から五十字以内で探し、始めの五字を抜き出さない。

問六 — 線部②「加増二千石をつかわす、与力二十騎の組頭を申しつける」ということを、正則は何と表現しているか。本文中から四字で抜き出さない。

問七 本文中の▼から▲までの松蔵の心情を説明したものととして適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父親を笑われて腹を立てた松蔵は、帰宅してから父親に戦功を尋ねたが、何もなかったことを知ってがっかりした。しかしそのことを全く気に掛けていない父親の姿を見てすっきりしたが、一方ではくやしい思いが残った。
- イ 父親を笑われて腹を立てた松蔵は、帰宅してから父親に戦功を尋ねたが、何もなかったことを知ってがっかりした。そして戦功がないことに全く引け目を感じていない父親のふがいない姿を見てさらに失望した。
- ウ 父親を笑われて腹を立てた松蔵は、帰宅してから父親に戦功を尋ねたが、何もなかったことを知ってがっかりした。そして自分のせいでわが子が笑いものになっているということを分かってくれない父親に失望した。
- エ 父親を笑われた松蔵は恥ずかしさと同時に、勇太へのくやしさがこみ上げてきた。勇太に言い返してやりたいが、父親は何の戦功も話してくれないので、くやしい気持ちのままだった。
- オ 父親を笑われた松蔵はあまりの恥ずかしさに、急いで帰宅して父親の戦功を尋ねたが、何もなかったことを知り、がっかりした。さらにそのことを全く気にしていない父親の姿を見て、気分も悪くなってきた。
- カ 父親を笑われた松蔵は恥ずかしくてたまらず、家に帰って父親に戦功を尋ねた。しかし何もなかったと言って真実を話してくれない父親に対して、もどかしさを感じると同時に、自分を一人前と認めてくれないことがくやしかった。

問八 次のア～オのうち、本文の内容と合致するものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 伝右衛門はつごうのいい場面にぶつからなかったため手柄を立てることができなかつたと、おのれの運の悪さを嘆き悲しんでいる。
- イ 伝右衛門は身分が低く貧しくとも家族がつつましやかに暮らしていければそれでいいのであり、ほうびも加増もいただけないことをすこしも気にしていない。
- ウ 松蔵が父の誉れをだれにもかたらなかったのは、それが友だちの父親たちをあなどることにつながるのをおそれたからである。
- エ 友だちから父親を笑われてくやしかった松蔵は、いつか見返してやりたいとその機会を虎視眈々^{こしたんたん}と狙っていた。
- オ 殿さまが浪人中の大膳を雇用し、大膳が殿さまに伝右衛門の「武勇」を報告しなければ、伝右衛門の加増と出世はあり得なかつた。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

有機物質に過ぎなかった生物が、やがて植物と動物に分化したことは、何を意味しているだろう。それは、いかに生きるか、という問いに対する二種類の回答を意味していると言つてよい。植物は、土に根を張り、水、空気、光を取り込み、光合成を起こして自身の体内に澱粉^{でんぷん}を生成する。そうやって、自身の生命を自然と共に循環させるのである。これは、不自由だが平穏な生き方だ。受け身だが危険の少ない生き方だ。これに対して、動物は自分の外にある養分を捕獲して生きる道を選んだ。だから、動物は移動し、争い、生きる場所を揚げようとする。

②けれども、生物の分化は、二つの傾向に分化したあとも絶えず交錯し、浸透し合う。植物の一部分にはわずかながらも動物的傾向が紛れ込んでいるし、動物の内部には植物的傾向と動物的傾向との葛藤が絶えずある。節足動物の本能は、Xを最小限にして、行動を一定の回路に限定する、という点では、植物的傾向に接近している。反対に、脊椎動物の知性は、Xを追求し、生きるための争いを続けて、支配する土地をどこまでも揚げようとする。この傾向は、人間に至つて最高の段階に達している。自己の身体の外に、身体能力をはるかに超える道具を作り出した知性動物は、厳密には人間だけである。人間種だけが、そのような知性を持つことができた。

生きる上で本能を選択した節足動物の方向は、そのなかに植物的な生き方を多分に含んでいる。③蟻や蜜蜂の集まりは、本能的な生の極限を示すものだが、そこでは個体のひとつひとつはほとんど意識をもっておらず、意識をもっているのは、つまり生きようとしているのは、巣の全体のように見える。巣から離れた個体は、生きてゆく方途を失つて死んでしまうほかない。巣はひとつの植物のようにそこに留まつて生き、巣の命を個体に行き渡らせている。

人間の知性が、何らかの意志によつて植物的な生の循環にみずからを繋ごうとするのなら、知性は知性以上の本能を、自身のなかに創り出すのでなくてはならないだろう。④「米の信仰的用途」に生きようとした人間たちには、何か「新たな本能」への意志と

(注2)

でも言うべきものがあつたように思われる。⑤「米の信仰的用途」を携えて、島から島へと海を渡つて行つた人々のなかに、植物に通じる生の循環を、人の暮らしのなかに立て、最高の秩序とする本能があつた。この本能は、人間の知性のなかに新たに生まれ出て、個体の知性をはるかに超えた能力として働くことができる。⑥柳宗悦が「民芸」と呼んで称揚し続けた人間の作物は、このような本能が誤ることなく産んできたものである。

(注3)

(注4)

昭和六年に書かれた「工芸的なもの」(『民と美』所収)という文章で、柳は「本能を生活の工芸化と云えないであろうか」と問いかけている。動物にとつて、本能は「欠くべからざる秩序」、「生活が依つて立つ基礎」であり「それを破るものは生命を失う」。生き物にとつて、生の工芸化は生きる手段であるだけでなく、その目的だと言つてもいい。「蜘蛛の網を見、蜂の巣を見る。工芸的ではないか」。このことは、動物だけに限らない。「植物の葉を見、花を見る。又は雪の結晶を見る。そこにも均斉の美があるではないか。定められた形があるのである。自然にも模様化への意志が見える。自然は秩序に生きる。そうして法を破るものには生命を許さない」。

「工芸的なもの」の本質を、柳は自然がその持続のために絶え間なく創り出す「型」のなかに見ている。そのような「型」の終わらない反復、再生を、彼は自然によつて意志された「模様化」と呼び、生の「工芸化」と呼ぶのである。そのような意味で、本能とは自然による生の「工芸化」だと言えるだろう。脊椎動物に与えられた知性は、各個体がそれぞれに持つ行動能力である。知性は個体ごとに勝手に働き、推理し、判断し、想像し、そして争い合う。本能は、群れや集合にしか与えられない。群れや集合が「型」を反復させ、再生させて生きるところには、必ず本能がある。このような本能は、動物のなかに保持されている「生の植物性」から来ている。

⑤

(注5)

柳の言う「工芸」は、あきらかに人間によるこの「生の植物性」に根を持つていよう。人間種に本能の残滓^{ざんし}があり、「生の植物性」が「Y」脈を保っている限り、その生はいたるところで「工芸化」への路を開いている。柳はその例を列挙している。バスの車掌が話す言葉の職業的な抑揚、看板の文字の模様化された均一な形、豆腐屋の呼び声、僧侶の読経、民画の様式、舞踊の定まり、

茶道の礼法、花道の約束、みな生の「工芸化」にほかならない。

工芸による「型」の反復が、植物的な生の循環にみずからを繋ごうとする人間の意志から出ているのだとすれば、そのような意志が、狩猟、牧畜の生活よりも、農の暮らしから出ていることは疑いない。農の暮らしのなかでも、稲作の暮らし、あるいは柳田の言う「米の信仰的用途」を伴う生き方と深く手を結んできたことは確かではないか。

言うまでもなく「工芸的なもの」は、世界性を持つている。が、その原理の中心を最も純粹に顕わしている場所は、柳田國男の「一国民俗学」が追究し続けた、米作りによる祭の暮らしだったと思われる。柳宗悦の民芸運動では、**A**、こうした考え方は、はつきりとした形を取っては語られていない。**B**、彼の言う「民芸」の究極原理は、**C**その最も純粹な発生点は、やはりこのような暮らしの形に置かれるべきものだろう。柳の民芸思想と柳田の民俗学とを、それらのなかで語られた膨大な言葉を、同時に引き寄せ、組織づけ、各々の姿とさせている磁場は、いつもここなのである。

柳は、美術、芸術という概念が工芸から完全に切り離されて成り立ったのは至極最近のこと、厳密には十九世紀後半のヨーロッパにおいてだと断言する。それまで、ArtはCraftと別にはなかった。Craftsmanの修練されたskill(技、巧)を抜きにしてArtというものが存在するとは考えられていなかった。芸術というわけのわからぬ近代の概念が、skillを欠いた変則のArtistを次々に生んだ。彼らは、やはりわけのわからぬ個人的名声によつて妙な立身出世をし、特権を得、その「作品」は法外な値札を貼られて世間に流通するようになった。そのような「作品」は、根本からskillを欠いているがゆえに、もちろん物の用には応じず、生活する人の愛着をも受けず、天才好きな一部の金持ちだけが所有する。それでも、そうした「作品」の威光は途轍もないところまでいき、ついには国家によつて人類の榮譽を代表する地位にさえ置かれる始末である。

「芸術」という幻想世界から追放された工芸は、それでもなお活きている。人の暮らしが、何らかの技の修練とともに営まれるところでは、工芸は必ず生きて、求められるだろう。ところで、「芸術」や「芸術家」の概念が、西洋近代に生じたということは、少しも不思議なことではない。個人を基礎的単位として共同体を組織するのは、狩猟、牧畜を主たる生存手段とする人々の生

あると言つてよい。このような共同体は、発生時から個人の知性を土台にした社会である。ここでは、「工芸的なもの」は、それがいかに「型」に従う手技によつていたとはいえ、やはり始めから個人の知性による浸透を、より多く受けている。西洋社会の工芸は、遠く古代から個人芸術の芽を内包していたのではないか。

近代の機械文明は、その芽を一挙に開花させた。なぜなら、大資本による工場の機械生産は、工芸の手技を一挙に無用にさせ、そこから分化、独立したがつていた個人芸術を突如として全面解放したからである。解放された個人芸術は、手技を離れた。いや、手技を修練するのに不可欠の機会、理由、根拠を失つたのである。この時にもなお生き残つた工芸は、ひどく肩身の狭いところに追いやられた。芸術家は、その作によつてではなく、知性や見識なるものによつて工人を見下す。世間はたちまちその種の侮蔑を信用する。工人は萎縮し、自分は世間にとつてもはや取るに足りない者と感ずるようになる。

西洋の機械文明を生み出したものは、狩猟、牧畜にとつて有効な個々の知性であり、知性による推理や予測や数量化だった。このような文明は、集団で働く工人の手技を無用化する。労力を省いて、合理化する、というわけである。しかし、現に在る物をよく見てみるがいい。分担して働く工人の手技は、知性によつてではなく、本能に似た何ものかによつてはつきりと導かれている。それが「型」を信じ、反復、再生させる驚くべきやり方は、人類が磨き続けた人類だけの本能——知性をはるかに超えた本能によつていのではないか。柳が言いたいのは、このことである。

(前田英樹『民俗と民藝』より。なお読解の便を図つて、柳の引用文中の旧仮名遣いを現代仮名遣いに、本文中の「民藝」「工藝」は「民芸」「工芸」に表記を改めた。)

(注1) 米の信仰的用途…古代の稲作に対する筆者の考え。かつて人々は、米を作ることによって年ごとの自然の循環を意識し、かつそれは、人々の暮らしの時間秩序をも決定するものであった。こうした、人間が自然の一部となりきる営みとしての稲作を、人々は神からの恵みととらえ、その豊かな成就を一心に願ひ、励んだと筆者は考えている。

(注2) 粃種…稲の種にする粃。

(注3) 柳宗悦…日本の民芸研究家・宗教哲学者。(一八八九—一九六一)

(注4) 民芸…庶民の生活の中から生まれた、郷土的な工芸。実用性と素朴な美とが愛好される。柳宗悦の造語とされる。

(注5) 残滓…のこりかす。

(注6) 柳田…柳田國男のこと。日本民俗学の開拓者とされる。(一八七五—一九六二)

(注7) Art…英語で芸術のこと。

(注8) Craft…英語で工芸のこと。

(注9) Craftsman…英語で工芸家のこと。

(注10) Artist…英語で芸術家のこと。

問一 — 線部①「いかに生きるか、という問いに対する二種類の回答」とあるが、これに該当する箇所を「植物のゝ生き方」「動物のゝ生き方」につながる形で、それぞれ十六字と十七字で本文中から抜き出しなさい。

・植物の 十六字 生き方

・動物の 十七字 生き方

問二 — 線部②「生物の分化は、二つの傾向に分化したあとでも絶えず交錯し、浸透し合う」とは、どのようなことを言っているか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あらゆる植物と動物は、自然の大きなサイクルの中のひとつであるということ。

イ 動物は、動物的傾向と植物的傾向の葛藤を経験することで知性を獲得したということ。

ウ 動物の中にも植物的傾向は見られ、また、植物にも動物的傾向が含まれているということ。

エ 生物の分化の中で、植物は動物になろうとし、動物は植物になろうとすること。

オ それぞれの生物は、進化の過程で動物になったり植物になったり変化するということ。

問三 本文中の X に共通して当てはまる二字熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 移動 イ 危険 ウ 循環
エ 平穏 オ 分化

問四 — 線部③「蟻や蜜蜂の集まり」とあるが、この例を挙げる筆者の目的を述べたものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 動物的傾向をほとんどもたない動物を挙げることで、今後「節足動物」は植物となり、知性動物としての人間とは一層の隔たりが生じてしまうことを暗示するため。
イ 植物に近い「節足動物」を挙げることで、知性にかたよった人間こそ、「節足動物」に学ぶべき点が多くあるという主張を展開するため。
ウ 植物的傾向を強く持つ「節足動物」を挙げることで、人間もまた「節足動物」と同じ傾向を持っているという考えにつながるため。
エ 植物的傾向を多く含んだ動物を挙げることで、個体よりも巢の命を優先させる「節足動物」が人間よりも劣っているということを確認するため。
オ 個体の命より巢全体が生きることを目指す動物を挙げることで、人間よりも「節足動物」の方が種の存続において優れているということを指摘するため。

問五 — 線部④「知性以上の本能」とあるが、筆者は「知性」と「本能」をそれぞれどのようなものとしてとらえているか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「知性」は人間個体ごとに勝手に働く能力であり、「本能」は個体をこえて働く能力である。
イ 「知性」は高等動物のみが持っている能力であり、「本能」は下等生物のみが持っている能力である。
ウ 「本能」は個体どうしの激しい競争を生むが、「知性」はそれを抑えて個体の共生を志すものである。
エ 生きるための根源的な力である「本能」は、社会性のある「知性」によって制御されるべきである。
オ 植物的な力である「本能」と動物的な知恵である「知性」は、相乗効果によって育つものである。

問六 — 線部⑤「人間によるこのへ生の植物性」とは、どのようなことを言っているか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 本能を捨てて知性のみに頼ること。
イ 種を維持するため進化し続けること。
ウ 人類の繁栄のため個人が技能を競うこと。
エ 「型」の反復と再生を繰り返すこと。
オ 個体としての命を尊重して生きること。

問七 本文中の Y に当てはまる漢字一字を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 山
イ 水
ウ 動
エ 静
オ 文

問八 — 線部⑥「農の暮らし」について、ここで述べられている「農の暮らし」にあてはまるものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 泥にまみれて畑仕事にはげむこと。
イ 豊作祈願の祭りなどを毎年行うこと。
ウ 共同作業により効率的に生産すること。
エ 毎年異なる作物を畑に栽培すること。
オ あらゆる動物を殺生しないこと。

問九 本文中の A C の中であてはまる語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア けれども イ あるいは ウ むろん

問十 — 線部⑦「芸術というわけのわからぬ近代の概念」とあるが、筆者はなぜ「工芸」と比較して「芸術」に否定的なのか。その理由として **適当でないもの** を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 作り手の技術に基づかず、人々の生活に役立たないものだから。
イ 何の見識もない、無知な作者によって作られたものだから。
ウ 法外な値が付けられ、限られた人しか所有できないものだから。
エ 生活する人の愛着を得られないのに、国家によって重んじられるものだから。
オ 性能に基づかない評価によって、価値が保たれているものだから。

問十一 — 線部⑧「『芸術』や『芸術家』の概念が、西洋近代に生じたということ」は、少しも不思議なことではない」とあるが、なぜ近代の西洋に「芸術」や「芸術家」という概念が生じたのか。本文中の言葉を使って六十字以内で答えなさい。

問十二 筆者は、人間にとって「工芸」とはどのようなものであるととらえているか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 西洋的な農の文明と東洋的な狩猟の文明が浸透し合うことで生まれた、人間固有の生活態度・姿勢である。
イ 東洋的な農の暮らしに根づいたものであり、作り手の試行錯誤によって、国家がその価値を認めたものである。
ウ 西洋的な牧畜の暮らしの中で磨かれた知性が生んだ技術で、効果的な推理や予測によって形成された作品である。
エ 洋の東西を問わず、全人類が普遍的にもつ本能による、物作りの営みである。
オ 自然が自らを持続させようとする営みの一つであり、古来より米作りを行ってきた東洋にしかないものである。

1	
2	
3	
4	
5	(ねる)

一
→

問 問

問三	1	
	2	
	3	
	4	
	5	
	6	

問四

問五

問六

問七

問八

[illegible][illegible]

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九	A		B		C	
問十						

問十一

問十一

五